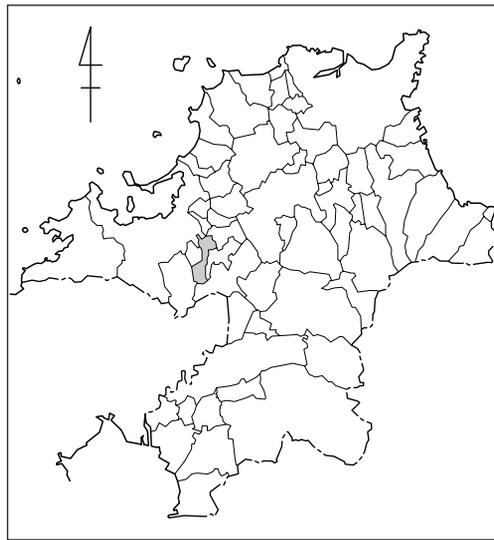


たに がに い せき ぐん
谷蟹遺跡群 2

— 第 2 次 調 査 —

大野城市文化財調査報告書 第184集



2 0 2 1

大野城市教育委員会

序

福岡県大野城市は福岡平野の南部に位置し、西暦665年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた街です。特に市の南部には、6世紀中頃から9世紀中頃にかけて須恵器を焼いた窯跡が数多く見つかっており、「牛頸須恵器窯跡」として国の史跡に指定されています。これまでに300基以上の窯跡が調査され、未調査の窯跡も含めると600基にせまるものと考えられています。

今回報告する谷蟹遺跡群は、この牛頸須恵器窯跡の一角にあります。過去の調査では複数の須恵器窯跡を確認しており、生産の一翼を担う遺跡であったことが判明しています。今回実施した調査では窯跡は確認できなかったものの、木炭生産に関連する遺構が見つかり、須恵器生産以外の山林利用を解明する上で重要な成果となりました。

本書により発掘調査の成果が広く世に知られ、地域の歴史や文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたり多大なるご理解、ご協力いただきました土地所有者の皆様方をはじめ関係各位に対しまして、厚くお礼申しあげます。

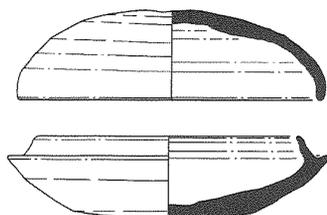
令和3年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 吉富 修

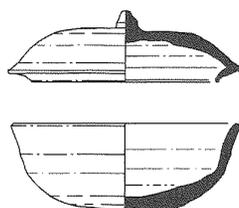
例 言

1. 本書は、福岡県大野城市旭ヶ丘1丁目834番2、835番4、837番3所在の谷蟹遺跡群第2次調査の報告書である。
2. 調査は、宅地造成に伴う事前調査として実施し、発掘調査から報告書作成に至る費用は事業者が負担した。
3. 発掘調査は、山元瞭平が担当した。
4. 遺構実測は山元・木原 堯が行った。
5. 地形測量は、I区を(株)イビソク、II区を(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
6. 遺構写真は山元が撮影し、空中写真は(有)空中写真企画に委託した。
7. 遺物写真は、(株)写測エンジニアリングに委託し、牛嶋 茂が撮影した。
8. 遺物実測・拓本・製図は本市整理作業員が行い、遺構図製図は山元が行った。
9. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修）を使用した。
10. 本書図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標（第II系）による。
11. 本書に掲載した遺跡分布図は、国土交通省国土地理院発行の25,000分の1地形図『福岡南部』『不入道』を使用した。
12. 本書に掲載の出土遺物・実測図・写真は、大野城市教育委員会が保管・管理している。
13. 本書における遺物名称のうち、須恵器杯類は平城京分類（凡例）による呼称を用いる。
14. 焼土坑については、現場にて小嶋 篤氏（九州国立博物館）にご教示頂いた。また、土師器焼成土坑の観点から、窯跡研究会の浜中有紀氏（同志社大学）ご協力のもと、望月精司氏（小松市教育委員会）に所見を頂いた。
15. 本書の執筆、編集は山元が行った。

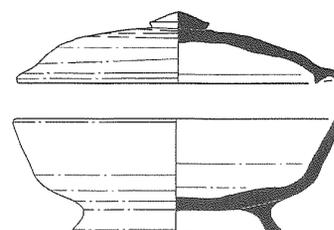
【凡例：須恵器杯類名称】



杯H



杯G



杯B

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
II. 位置と環境	
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
III. 調査成果	
1. 調査概要	7
2. 遺構と遺物	7
IV. 総括	
1. 遺構の時期と変遷	15
2. 焼土坑について	15

挿図目次

第1図 調査地位置図 (1/2, 500)	2
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25, 000)	4
第3図 遺構配置図 (1/300)	5～6
第4図 1区SX01実測図 (1/30)	8
第5図 1区SX01出土遺物実測図 (1/3)	8
第6図 2区SK01実測図 (1/30)	9
第7図 2区SK01出土遺物実測図 (1/3)	9
第8図 2区SX01・SX02実測図 (1/30)	10
第9図 2区SX03・SX04実測図 (1/30)	11
第10図 2区SX02・SX04出土遺物実測図 (1/3)	11
第11図 2区包含層出土遺物実測図1 (1/4)	12
第12図 2区包含層出土遺物実測図2 (1/3)	13
第13図 試掘調査出土遺物・採集遺物実測図 (1/3)	14

表目次

第1表 出土遺物観察表	18
-------------	----

図 版 目 次

- 図版 1 (1) 1区全景(南西から) (2) 1区SX01完掘状況(南西から)
- 図版 2 2区全景(北西から)
- 図版 3 (1) 2区全景(北西から) (2) 2区谷部遺構完掘状況(北西から)
- 図版 4 (1) 2区SK01完掘状況(北西から) (2) 2区SK01遺物出土状況(北西から)
(3) 2区SX01検出状況(北西から)
- 図版 5 (1) 2区SX01完掘状況(北西から) (2) 2区SX01土層(西から)
(3) 2区SX02完掘状況(北西から)
- 図版 6 (1) 2区SX02土層(北西から) (2) 2区SX03完掘状況(北西から)
(3) 2区SX03土層(南から)
- 図版 7 (1) 2区SX04完掘状況(北東から) (2) 2区SX04土層(北西から)
(3) 2区SX04遺物出土状況(北西から)
- 図版 8 出土遺物

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

調査対象地は、大野城市旭ヶ丘1丁目834番2、835番4、837番3であり、周知の埋蔵文化財包蔵地「谷蟹遺跡群」に当たる。調査以前は埋蔵文化財の包蔵地外であったが、平成30年度に試掘調査を実施した結果、弥生時代から古代にかけての遺構・遺物が確認された。

平成29年5月、事業者から対象地の埋蔵文化財に関する問い合わせがあり、上記のとおり試掘調査を実施した。対象地が広範なことから、試掘調査は2度に分けて行うこととした。平成30年4月3日から4月13日にかけて対象地東側（旭ヶ丘1丁目834番2、835番4、837番3）の試掘調査を実施した結果、遺構及び遺物を確認した。また、平成30年10月22日から11月21日にかけて対象地西側（旭ヶ丘1丁目834番25）の試掘調査を実施したところ、遺物は確認したものの、遺構は確認できなかった。

事業者は当該地を宅地造成する予定であり、計画通りに工事が施工されると遺跡が破壊されるため、事業者との協議を重ねた。協議の結果、遺跡保護は計画上困難であることから、遺跡が破壊される部分について発掘調査が必要と判断された。事業者から造成予定図を添えて文化財保護法第93条に基づく届出を福岡県教育庁あてに提出し、平成30年11月27日付で発掘調査の指示が出された。また、平成30年12月5日付で埋蔵文化財発掘調査の依頼書・承諾書が提出された。これを受け、発掘調査は平成30年度及び令和元年度、整理・報告書作成は令和2年度に実施する旨、協議書を取り交わした上で、年度ごとに委託契約を締結し事業を実施した。

調査対象地は、試掘調査において遺構を確認した旭ヶ丘1丁目834番2、835番4、837番3であり、約8,206㎡である。平成31年2月1日～3月31日、平成31年4月22日～令和元年11月5日まで現地での調査を実施し、令和2年4月13日～令和3年3月まで整理作業を実施した。

なお発掘調査及び整理作業に関する費用は、伊藤九洲男氏が負担した。多大なるご理解とご協力をいただいた伊藤九洲男氏には記して感謝の意を申し上げたい。

2. 調査組織

平成30年度～令和2年度における調査・整理体制は以下の通りである。

教育長	吉富 修
教育部長	平田 哲也（～2年3月） 日野 和弘（2年4月～）
ふるさと文化財課長	石木 秀啓
係長	徳本 洋一（～31年3月） 林 潤也 佐藤 智郁（～2年4月） 上田 龍児（31年4月～）
主査	徳本 洋一（31年4月～）
主任主事	秋穂 敏明（31年4月～）
主任技師	上田 龍児（～31年3月）

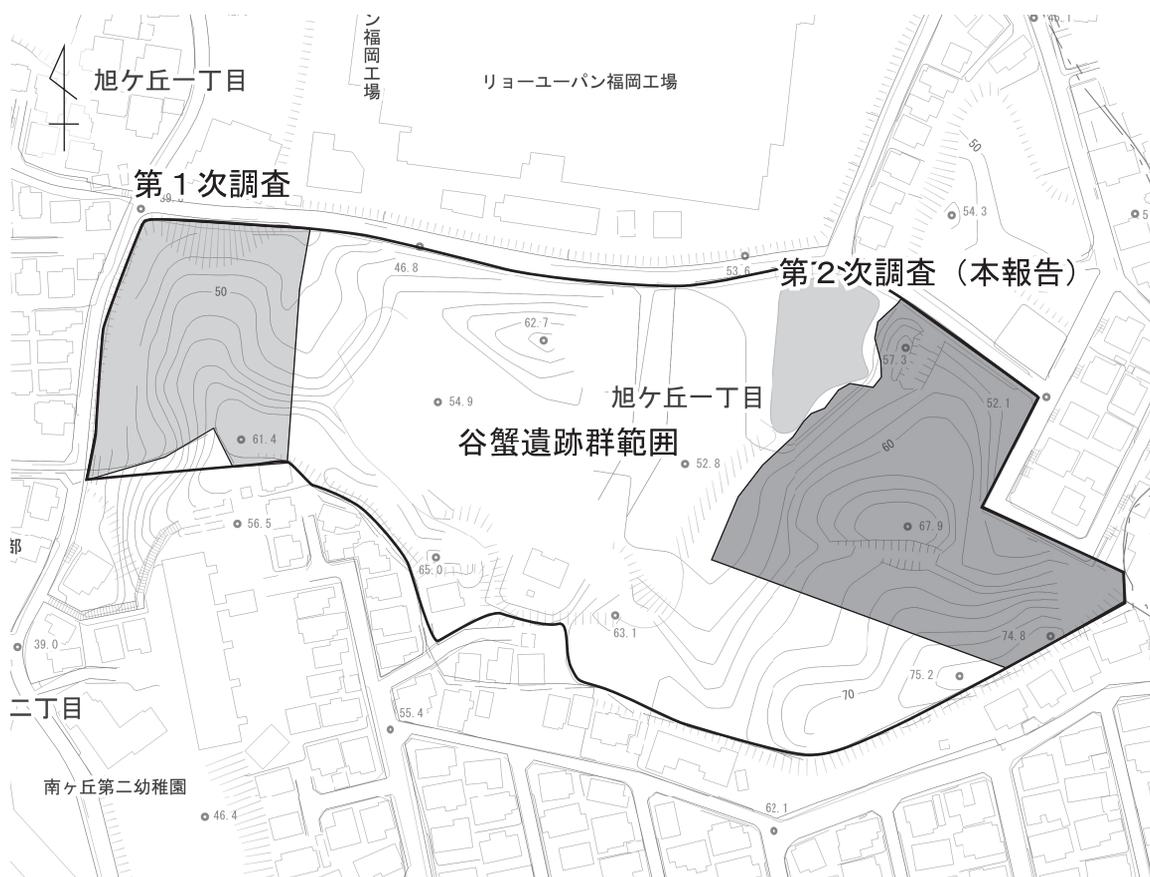
技師 山元 瞭平 齋藤 明日香 (2年4月～)
 主事 (任期付) 坂井 貴志 (～30年9月) 鮫島 由佳 柴田 剛 (～31年3月)
 嘱託・会計年度任用職員 (調査) 澤田 康夫 木原 堯 (31年4月～)
 三浦 萌 (30年4月～9月)
 嘱託・会計年度任用職員 (啓発) 山村 智子 浅井 毬菜 (30年4月～1年12月)
 深町 美佳 (2年4月～)
 嘱託・会計年度任用職員 (庶務) 呉羽 京子 (～31年3月) 永松 綾子 (31年4月～2年3月)
 西村 友美 (30年4月～) 三好 りさ (2年4月～)

発掘調査作業員 (平成30年度・令和元年度)

有水 知晴 大津 幸男 大浦 旗江 川崎 敏次郎 梶原 久美子 倉住 孝枝
 香野 博通 佐々田 薫 佐藤 寛行 篠崎 繁美 瀧口 松夫 仁田 幸男
 田代 薫 田中 悦子 田中 良一 東島 真弓 宮原 ゆかり 安里 由利子
 山下 宏昭

整理作業員 (令和2年度)

小畑 貴子 小嶋 のり子 古賀 栄子 白井 典子 篠田 千恵子 津田 りえ
 仲村 美幸 氷室 優 松本 友里江



第1図 調査地位置図 (1/2,500)

II. 位置と環境

1. 地理的環境

大野城市は福岡平野東南部の最奥部に位置し、南北に細長く中央部がくびれた形を呈する。北部には四王寺山とそこから南西に派生する低丘陵群、南部には牛頸山とそこから派生する低丘陵群があり、両者に挟まれた中央部には御笠川が流れ、沖積地や氾濫原といった低地が広がっている。南部の牛頸山は背振山系の一角をなしており、地盤は早良花崗岩で、表層には風化した真砂土が被覆する。牛頸山の北麓は牛頸川をはじめとした小中河川による開析が進み、無数の丘陵が形成されている。これらの丘陵には多数の須恵器窯が築かれており、史跡「牛頸須恵器窯跡」として指定されている。今回調査した谷蟹遺跡群第2次調査地点はこうした丘陵の北端部分に位置する。周辺は開発が進み本来の地形は大きく改変されているが、本調査地は概ね旧状を留めている。

2. 歴史的環境

大野城市南部を中心とした牛頸山北麓地域では、旧石器時代から近世にいたるまでの遺跡が数多く確認されている（第2図）。ここでは古墳時代以降の様相について、簡潔に説明する。

大野城市南部は、古墳時代の中でも6世紀以降に遺跡数が増加する。九州最大の須恵器窯跡群である「牛頸窯跡群」の操業が開始されるのもこの時期である。最古相の窯跡は6世紀中頃のもので、窯跡群の北部に位置する本堂遺跡群や野添遺跡群において確認されている。当該期の集落は上園遺跡、塚原遺跡、日ノ浦遺跡、惣利西遺跡などで確認されており、その一部は粘土貯蔵穴や焼け歪んだ須恵器の存在から須恵器工人の集落と考えられる。

6世紀末から7世紀前半になると、小田浦窯跡群や中通窯跡群をはじめ、数多くの窯が操業され、操業範囲・生産規模ともに拡大する。また、牛頸窯跡群に特徴的な複数の煙道を持つ「多孔式煙道窯」の登場もこの時期である。小田浦窯跡群や月ノ浦遺跡では須恵器に加えて瓦も焼成しており、那津官家と目される福岡市那珂遺跡へ供給されている。

集落は梅頭遺跡群や本堂遺跡群で確認されており、丘陵斜面をL字に掘り込んだ部分に住居を形成するという特徴的なもので、窯に付随する集落と考えられている。また古墳については、後田古墳群や小田浦古墳群などがあり、窯の操業と連動して築造されている。さらに、梅頭遺跡群1次調査では廃窯後に鉄刀・鉄鏃等を副葬し「墓」として転用した事例も確認されている。なお、ヘラ書き須恵器から、須恵器生産には「大神部」が関わっていたことが指摘されている。

7世紀後半には窯の数が減少し、小型の窯が出現する。特徴的な多孔式煙道窯も当該期を境に姿を消し、直立煙道窯という新たな窯構造が登場するなど、生産の転換期にあたる。

奈良時代になると、須恵器窯は南部へと操業範囲を広げ、生産規模も拡大する。ハセムシ窯跡群、井手窯跡群など群集して操業される例が多く、小型器種中心の生産へと転換する。一方集落は、日の浦遺跡など平地に展開している。続く平安時代には窯の数が急激に減少し、9世紀中頃に位置付けられる石坂窯跡群E3号窯跡を最後にその操業は終焉を迎える。



【春日市】

- | | | | | | |
|---------|-----------|------------|-------------|------------|----------|
| 1. 惣利遺跡 | 2. 惣利西遺跡 | 3. 惣利東遺跡 | 4. 惣利北遺跡 | 5. 向谷北遺跡 | 6. 平田北遺跡 |
| 7. 円入遺跡 | 8. 春日平田遺跡 | 9. 春日平田西遺跡 | 10. 春日平田東遺跡 | 11. 浦ノ原窯跡群 | |

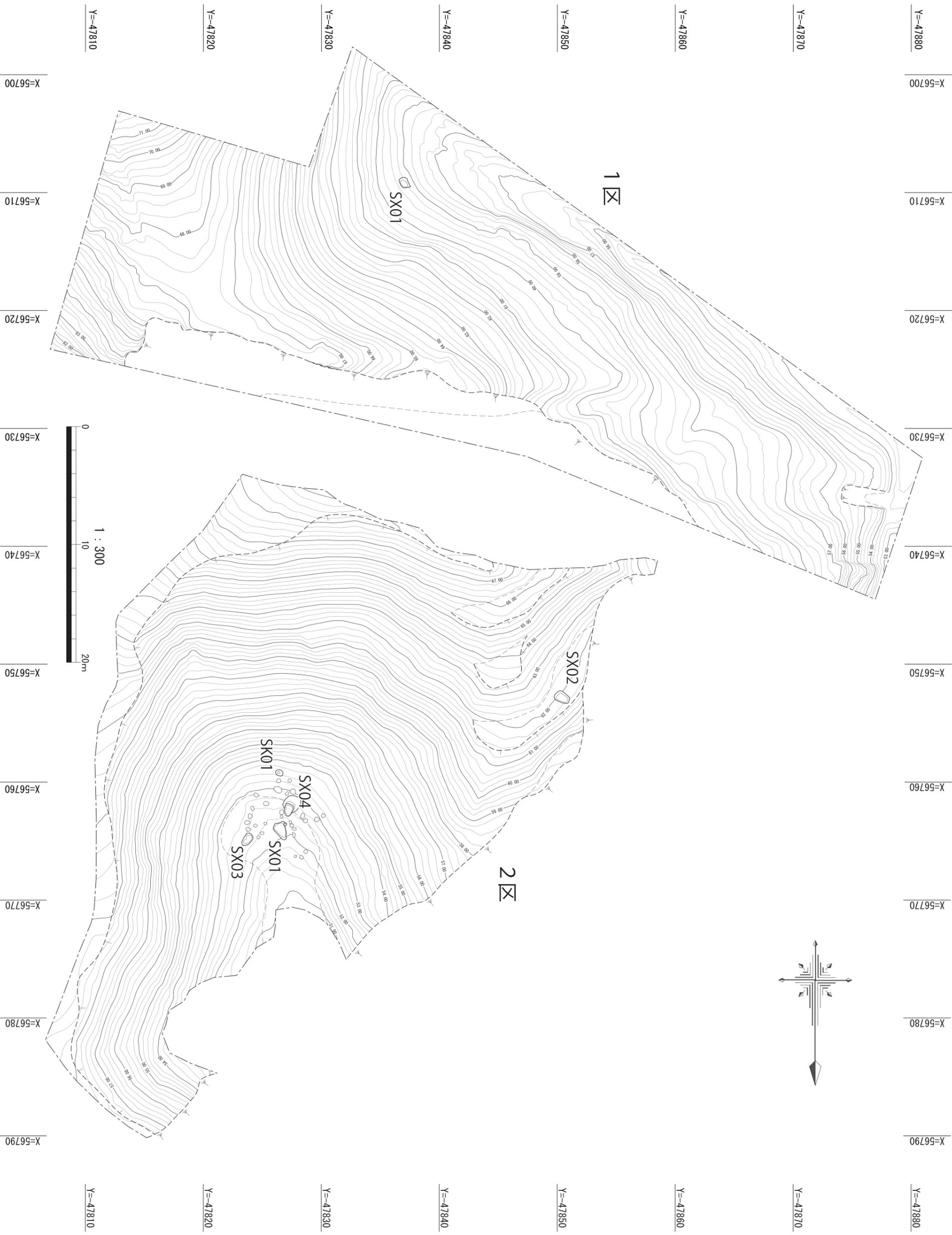
【大野城市】

- | | | | | | |
|-------------|----------------|-----------|------------|--------------|-------------|
| 12. 梅頭遺跡群 | 13. 本堂遺跡 | 14. 上園遺跡 | 15. 永福遺跡 | 16. 天神田遺跡群 | 17. 末次遺跡 |
| 18. 谷川遺跡 | 19. 唐土遺跡 | 20. 父子嶋遺跡 | 21. 矢倉遺跡 | 22. 小水城周辺遺跡 | 23. 上大利小水城跡 |
| 24. 谷蟹遺跡群 | 25. 野添遺跡 | 26. 野添窯跡群 | 27. 花無尾遺跡 | 28. 平田1・2号窯跡 | 29. 横峰I遺跡 |
| 30. 横峰II遺跡 | 31. 屏風田遺跡 | 32. 日ノ浦遺跡 | 33. 塚原遺跡群 | 34. 畑ヶ坂遺跡 | 35. 下野原遺跡 |
| 36. 月ノ浦遺跡 | 37. 正楽寺跡 | 38. 胴ノ元古墳 | 39. 胴ノ元窯跡 | 40. 胴ノ元遺跡 | 41. 大行事遺跡 |
| 42. 平野遺跡 | 43. 城ノ山窯跡・不動城跡 | 44. 中通古墳 | 45. 中通遺跡 | 46. 中通古墳群 | 47. 中通窯跡群 |
| 48. ハセムシ窯跡群 | 49. 長者原遺跡群 | 50. 笹原遺跡群 | 51. 足洗川遺跡群 | 52. 井手遺跡群 | 53. 原窯跡 |
| 54. 原浦遺跡群 | 55. 大谷遺跡群 | 56. 石坂窯跡群 | 57. 後田遺跡群 | 58. 小田浦遺跡群 | |

【太宰府市】

- | | | | |
|----------|-----------|----------|-----------|
| 59. 島本遺跡 | 60. 神ノ前遺跡 | 61. 篠振遺跡 | 62. 宮ノ本遺跡 |
|----------|-----------|----------|-----------|

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第3図 遺構配置図 (1/300)

Ⅲ．調査成果

1．調査概要

谷蟹遺跡群第2次調査地点は、大野城市の中央よりやや南側の旭ヶ丘1丁目834番2、835番4、837番3に位置する。牛頸山から北に派生する丘陵の先端部分に当たり、標高45～67m前後に立地する。対象地は北側にのびる二つの丘陵の間に挟まれた谷の最奥部及び周囲の丘陵である。周辺は既に大きく改変を受けており、株式会社リョーユーパンの工場や住宅が立ち並ぶものの、対象地には開発が及んでおらず、島状に取り残されていた。対象地全体は、杉をはじめとした樹木に覆われている。地形は概ね旧状を留めているものの、対象地中央を東西に横切る幅約9mの切り通しが存在する。

調査に先立ち、事業地全体における遺構の分布状況を把握するために試掘調査を実施した。対象地が広範であることから、初めに北側部分（旭ヶ丘1丁目834番2外3筆）から着手した。先述のとおり対象地には樹木が繁茂しており、重機の搬入が困難であったため、作業員による手掘りでの試掘調査とした。西側に隣接する谷蟹遺跡群第1次調査では須恵器窯跡が確認されていたことから、窯跡の存在を念頭に、丘陵斜面に0.4m四方の試掘ピットを悉皆的に掘削することで灰原や遺物の検出に努めた。灰原は確認できなかったものの、遺物の出土した地点に計3か所のトレンチを設定し掘削を行ったところ、複数の遺構・遺物を確認した。その後、対象地南側（旭ヶ丘1丁目834番25）においても同様の手法を用いて試掘調査を実施した。計8か所のトレンチを設定し掘削したところ、遺物は出土したものの、遺構は検出されなかった。重機による表土除去後も遺構の検出に努めたが、遺構の確認には至らなかった。以上の調査成果を踏まえ、遺構の確認された北側部分、約8,206㎡を発掘調査の対象とした。

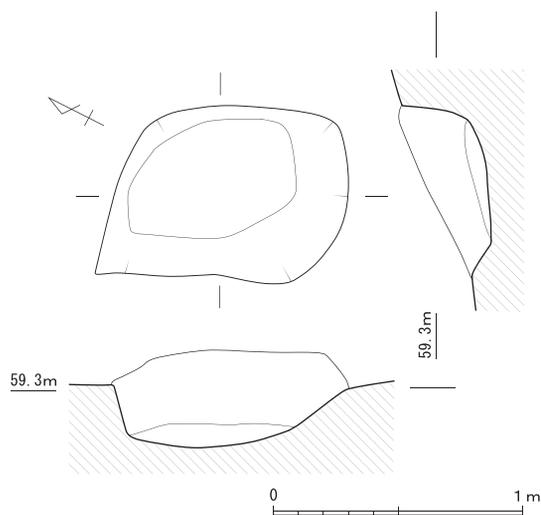
調査にあたっては、対象地を南北の2区画に分け、初めに対象地南側に当たる1区の調査を実施した。平成31年2月4日より重機による表土除去を開始し、断続的に作業員を動員しながら遺構の検出及び掘削を行った。調査の結果、丘陵の斜面下方に遺構を確認した。遺構の記録作成後、地形測量を実施し、その後は排土置場として利用した。

対象地北側の調査は、1区の調査終了後速やかに着手した。こちらの調査地は2区と呼称し、表土除去後の令和元年9月12日から作業員による遺構の検出と掘削を開始した。調査の結果、丘陵の斜面下方を中心に複数の遺構を確認した。遺構の完掘後、同年10月16日にバルーンによる空中写真を撮影した。その後、遺構の記録作成と地形測量を並行して実施した。同年11月5日に現場器材等の撤去をもって、現地での作業を終了した。

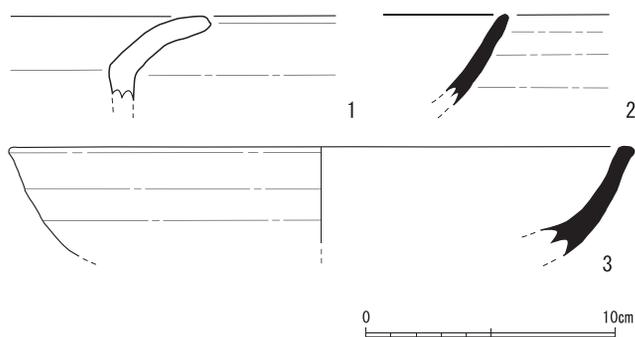
2．遺構と遺物

(1) 1区

1区は東側へ入り込む谷部および谷に面した北側丘陵斜面に当たる。調査の結果、不明遺構1基を検出した。遺物は、土師器・須恵器が出土した。



第4図 1区SX01実測図 (1/30)



第5図 1区SX01出土遺物実測図 (1/3)

SX01 (第4図、図版1)

谷の最奥部に位置し、標高59.25m前後の緩斜面に所在する。長さ0.95m、幅0.7m、深さ0.3m前後で隅丸長方形のプランを呈する。出土遺物は、土師器・須恵器がある。

出土遺物 (第5図)

土師器 (1) 甕の口縁部片である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部はわずかに面を有する。胴部内面には横位のケズリが施され、口縁部との境は明瞭である。

須恵器 (2・3) 2は杯身である。やや内湾しながら口縁部へいたる。内外面とも回転ナデ調整。3は小片であるが、盤に復元できる。復元口径25cmを測る。体部下半は丸みを帯び、口縁端部は外側へとつまみ出される。内外面ともに回転ナデ調整。

(2) 2区

2区は南側へ入り込む谷部と、この谷を取り囲む丘陵斜面に当たる。谷部については、遺構面とした花崗岩風化土の上層に、弥生から古墳時代の遺物を包含する黒褐色土が0.1～0.2mほど堆積していた。遺構は、土坑1基、不明遺構(焼土坑)4基のほか、複数のピットを確認した。ピットの多くは樹木の根穴とみられる。遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器が出土した。

SK01 (第6図、図版4)

谷の最奥部に位置し、標高53.5～53.75mの緩斜面に所在する。円形のプランを呈し、径0.6～0.65mを測る。埋土は暗灰黄色土である。完形の土師器杯が出土した。

出土遺物 (第7図、図版8)

土師器 (4・5) いずれも杯。4は、ほぼ完形。体部下半が強く丸みを帯び、内湾しながら口縁部にいたる。内外面ともに回転ナデ調整。口縁部内外面には油煙が観察でき、灯火具としての使用が想定できる。5は底部片で、4と同形態のものと考えられる。内面は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリ調整である。

SX01 (第8図、図版4・5)

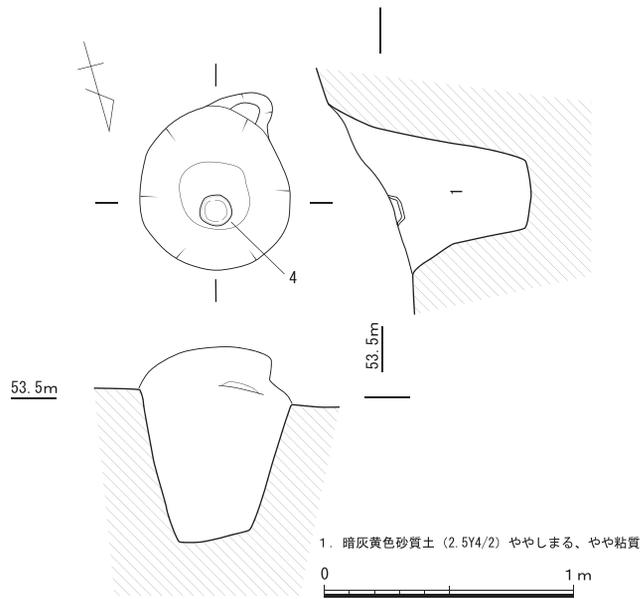
谷の最奥部に位置し、標高52m前後の緩斜面に所在する。壁面に強く被熱した痕跡が残る、いわゆる焼土坑と呼ばれる遺構である。平面プランは、隅丸の長三角形を呈する。長さ1.5m、最大幅0.95m、深さ0.3～0.4mを測る。等高線に対して概ね直交しており、最も鋭角となる頂点を斜面下方へと向ける。壁面はいずれも垂直気味に立ち上がっている。長辺をなす東西の壁面は、被熱痕跡を顕著に残す。いずれも壁面の北半部(斜面下方側)に被熱が見られ、地山が明赤褐色に変色するほか、一部は明黄褐色を呈し硬く焼きしめるような状況で、特に強く被熱したことを示唆する。一方短辺である斜面上方の壁面は被熱するものの、東西壁面に比べるとその痕跡は顕著ではない。

底面は斜面上方に向かって約15°の角度で傾斜している。底面はわずかに赤色化した被熱部分が確認できたものの、壁面と比較すると被熱は顕著ではない。なお、

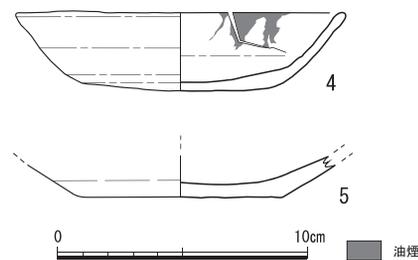
底面には不定形の浅い窪みが多数見られるが、これは樹木の根による攪乱と考えられる。遺構埋土は2層に分けられ、下層には焼土ブロックや炭化物を含む黒褐色土が堆積しており、焼土坑に関連するとみられる。上層については周囲から流れ込んだものと考えられる。遺物は弥生土器・土師器が出土したものの、いずれも小片で図示することはできなかった。

SX02 (第8図、図版5・6)

北西に面した丘陵斜面に単独で所在し、標高61.75～62.0mに位置する。この場所は等高線の間隔がわずかに広くなり、テラス状の平坦地をなしている。本遺構は、被熱痕跡を認める焼土坑である。平面プランは隅丸略方形を呈するが、斜面上方が幅広く、下方に行くにつれてわずかに幅を減じる。長さ1.23m、幅0.55～0.8m、深さ0.14～0.22mを測る。長軸は等高線に対して直交する。壁面はいずれも垂直気味に立ち上がり、被熱痕が確認できる。こうした痕跡は長辺のほうが顕著で、南北両壁面とも明赤褐色に変化しているうえ、一部は明黄褐色を呈し硬く焼きしめることから、強く熱を受けたものと考えられる。一方短辺は、いずれも被熱は見られるものの、その痕跡は部分的である。底面は斜面に沿って、約18°の角度で傾斜している。底面には若干の被熱痕が確認できたものの、壁面と比較すると顕著ではない。埋土には炭化物が少量含まれていた。遺物は、須恵器の杯

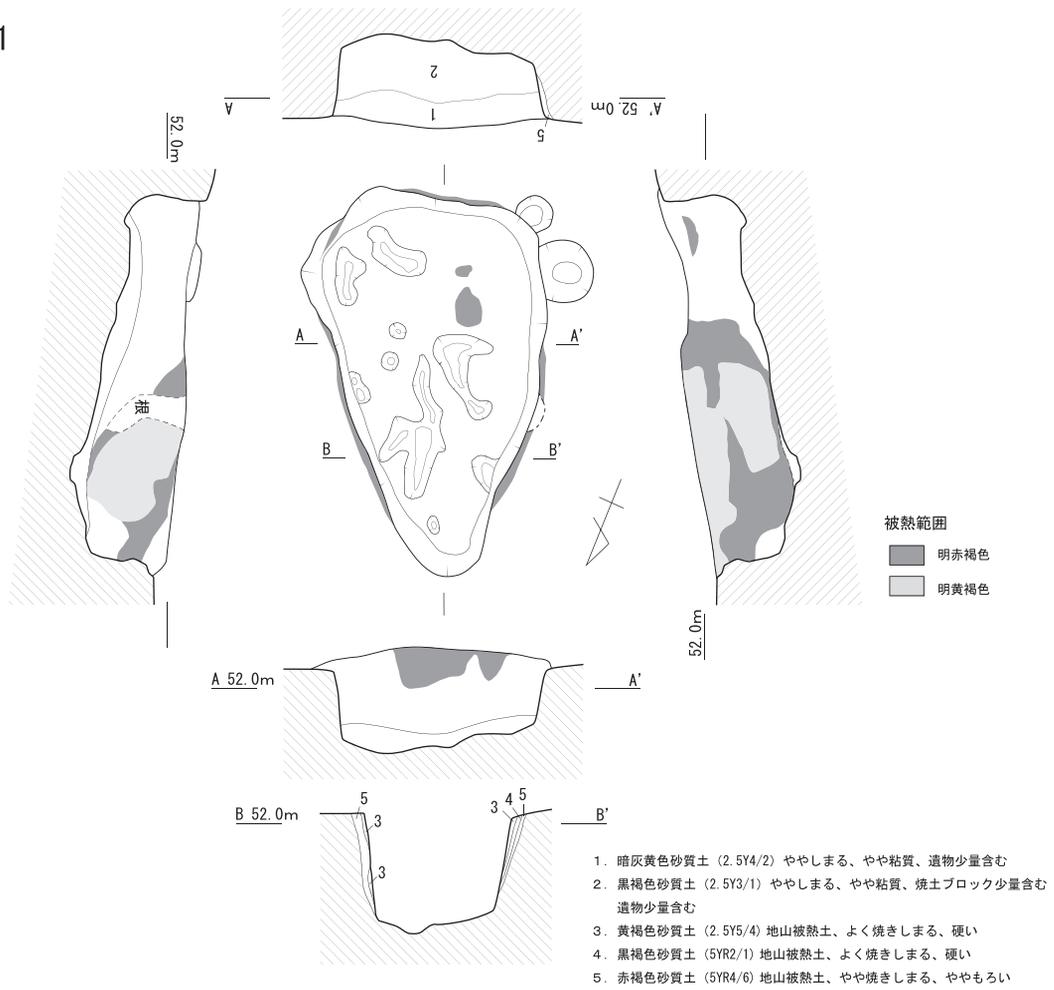


第6図 2区SK01実測図 (1/30)

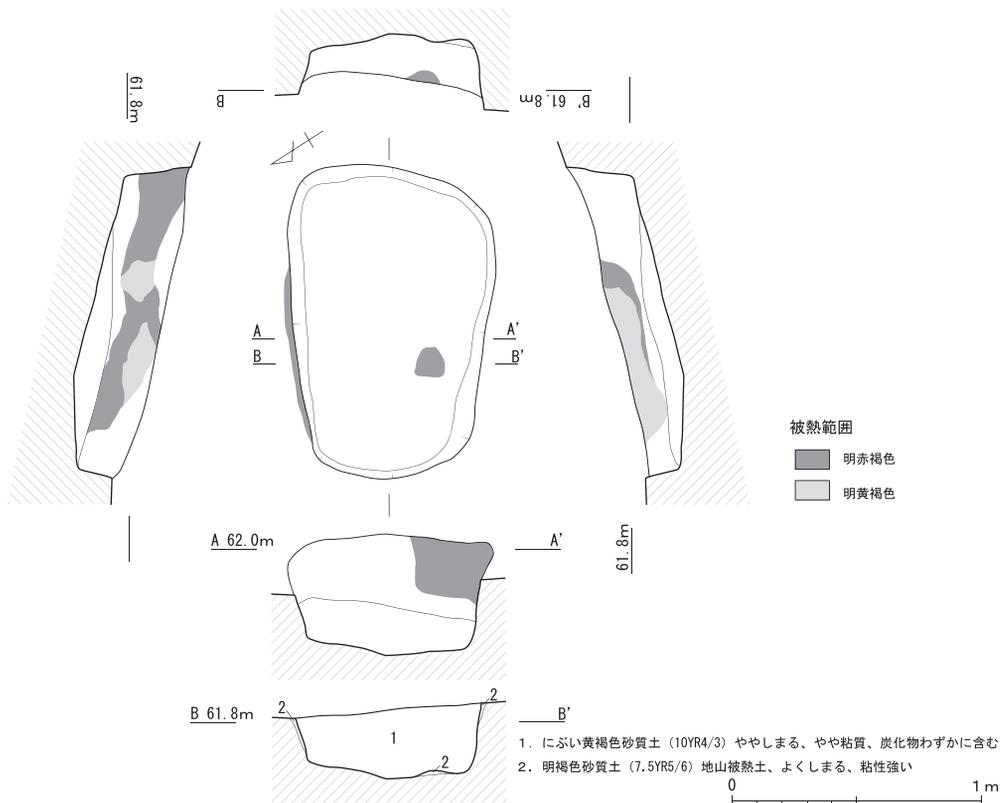


第7図 2区SK01出土遺物実測図 (1/3)

SX01

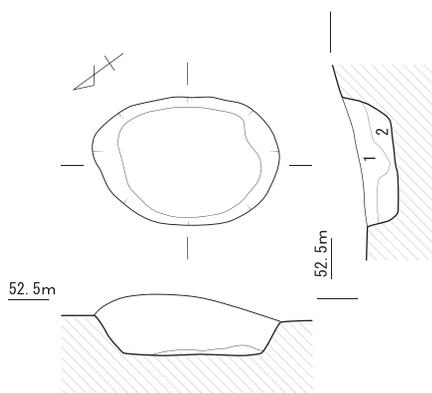


SX02

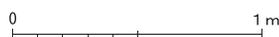


第8図 2区SX01・SX02実測図 (1/30)

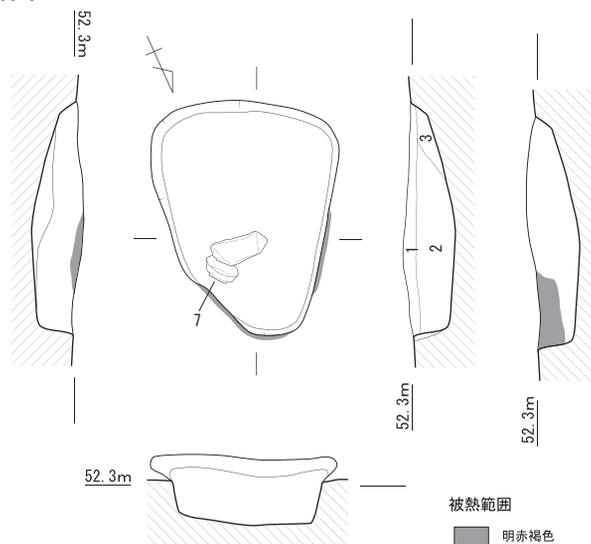
SX03



1. 黒色砂質土 (10YR2/1) しまりなし、粘性なし、炭化物混じる
2. にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) ややしまる、やや粘質



SX04



1. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3) ややしまる、粘性なし、炭化物少量含む
2. 黒褐色砂質土 (2.5Y3/1) ややしまる、やや粘質、1～5 cm角の炭化物片多く含む
3. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) ややしまる、やや粘質、炭化物少量含む

第9図 2区SX03・SX04実測図 (1/30)

B身が破片の状態で1個体分出土した。

出土遺物 (第10図、図版8)

須恵器 (6) 杯B身である。体部は直線的に開き、底部と体部との境は明瞭である。高台は、断面四角形をなす。焼成は甘く軟質で、黄橙色を呈する。内外面ともに回転ナデ調整。

SX03 (第9図、図版6)

谷部の緩斜面である標高52.25～52.50mに位置する。平面プランは楕円形を呈し、長さ1.1m、幅0.75m、深さ0.3mを測る。埋土に炭化物を含むものの、壁面に被熱痕跡は見られなかった。遺物も出土しておらず、他の焼土坑と同種のものかは不明である。

SX04 (第9図、図版7)

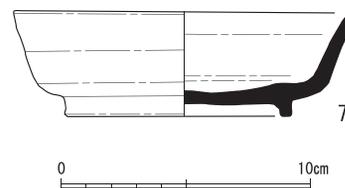
谷部の緩斜面である標高52.25～52.75mに位置し、SX01の南西側1mに近接して存在する。被熱痕跡が見られる焼土坑である。平面プランは隅丸の略三角形を呈し、長さ0.93m、最大幅0.75m、深さ0.1～0.2mを測る。等高線に対して概ね直交しており、最も鋭角となる頂点を斜面下方へ向ける。東西壁面は垂直気味に立ち上がるが、斜面上方の南壁は底面から緩やかに立ち上がっている。壁面の被熱痕は他の焼土坑に比べて明確ではないものの、東西両壁に認められる。いずれも壁面の北半部のうち、その上位に被熱痕が残る。

底面は斜面下方の頂点から0.4mまで水平気味であり、その後斜面上方に向かって9°の角度で傾斜する。底面に被熱の痕跡は見られなかった。遺構埋土は下層に炭化物を多く含む黒褐色土が堆積しており、焼土坑との関連が示唆される。埋土中より完形の須恵器杯B身が出土したほか、須恵器

SX02



SX04



第10図 2区SX02・SX04出土遺物実測図 (1/3)

を覆うように長さ20cm、幅10cmの花崗岩礫が検出された。なお、これらに被熱した痕跡は見られなかった。

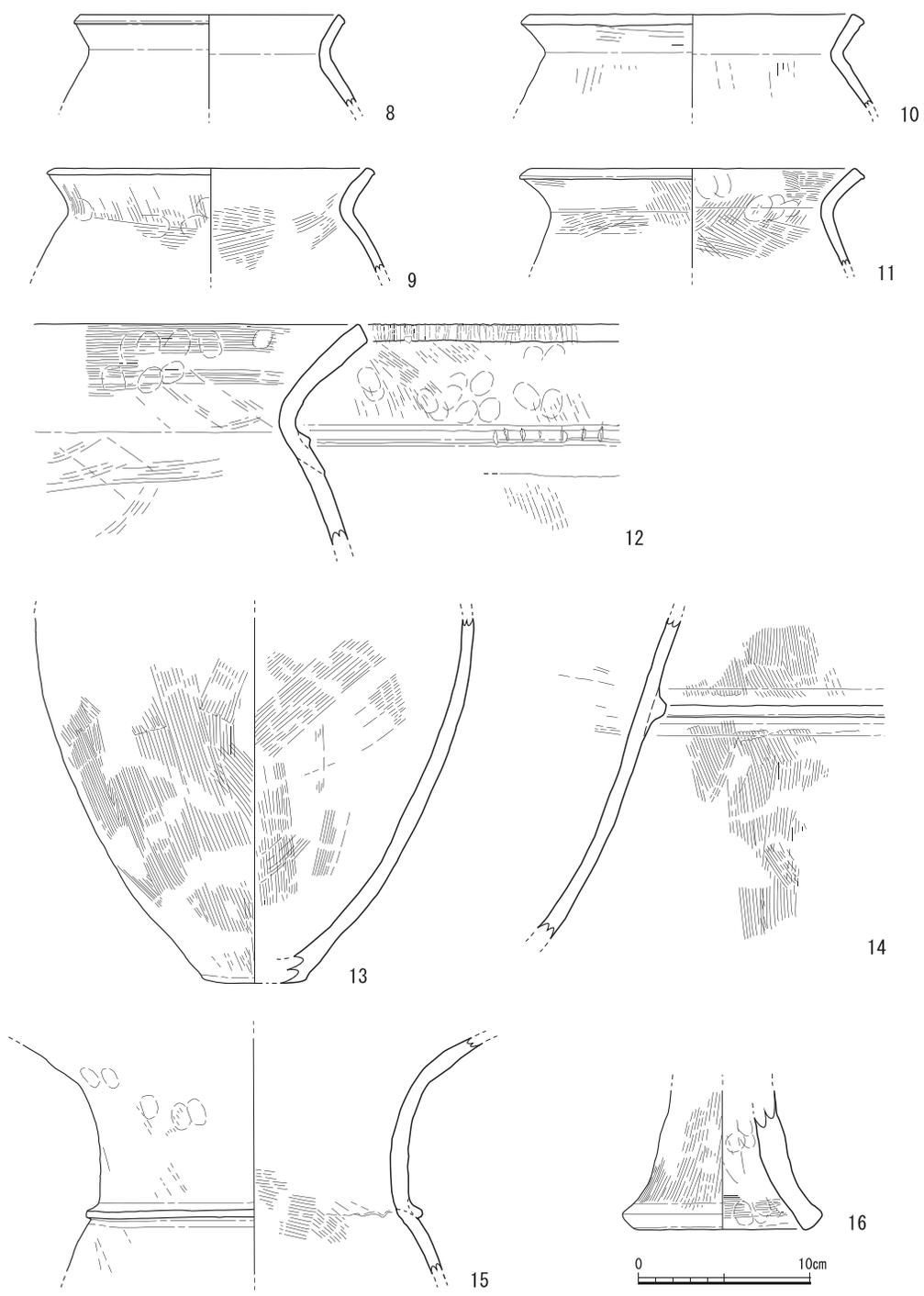
出土遺物（第10図、図版8）

須恵器（7） 須恵器杯B身である。体部は直線的にのび、体部下半は丸みを帯びる。高台は底部端からやや内側につき、断面長方形を呈する。内外面ともに回転ナデ調整。

(3) その他出土遺物

2区包含層出土遺物（第11・12図、図版8）

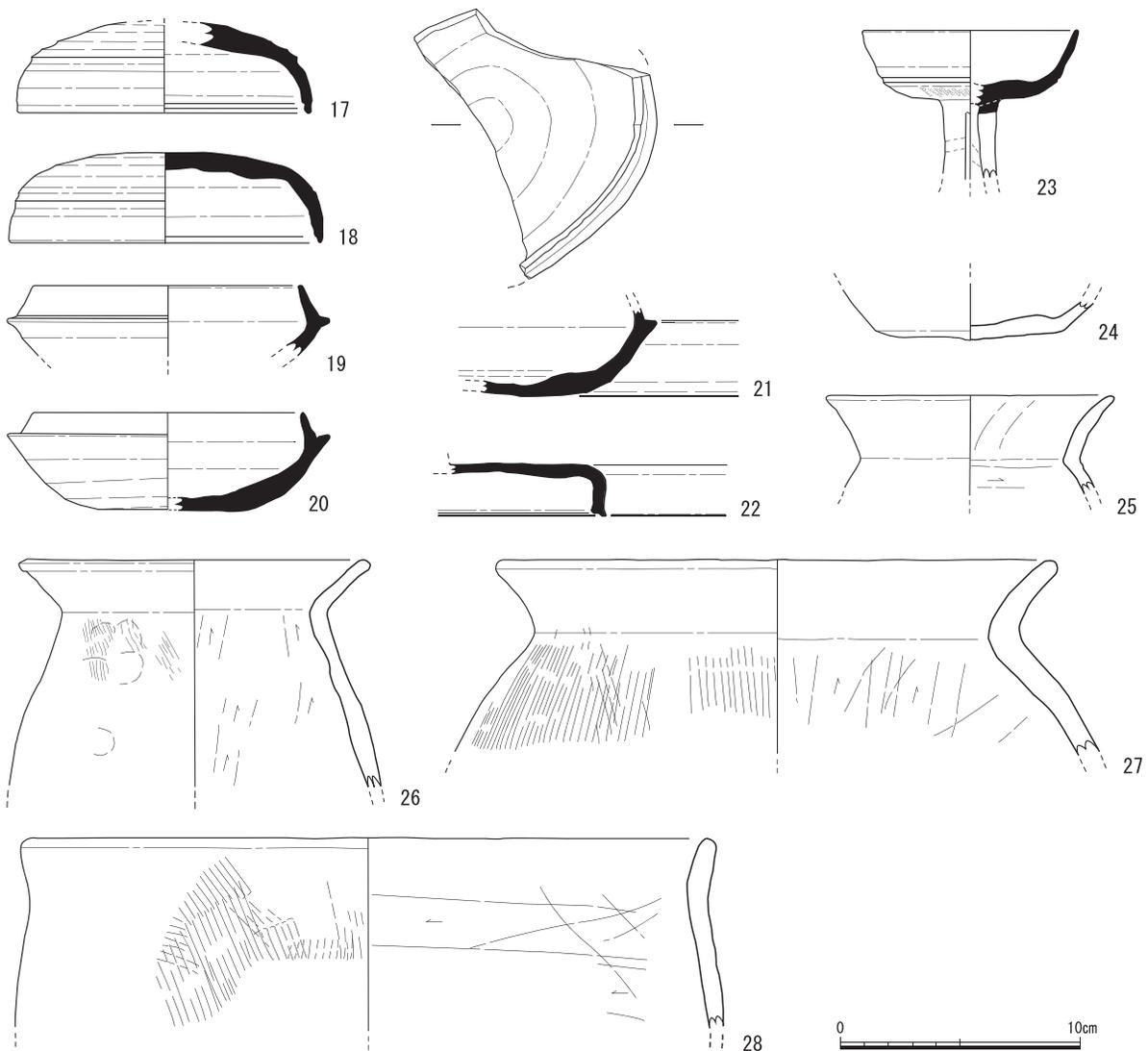
弥生土器（8～16） 8～12は、甕の口縁部。いずれも口縁は「く」の字状に開き、端部は面をなす。



第11図 2区包含層出土遺物実測図1（1/4）

肩部はあまり張らない。口縁部、胴部は内外面ともにハケ。12は他と比べて大型のものである。口縁端部には板状工具で浅い刻みが施される。胴部外面の屈曲部下位に断面三角形の突帯が1条巡る。突帯には刻みが施される。口縁部、胴部は内外面ともにハケ。13は甕で、胴部から底部にかけて残存する。胴部上半が張る倒卵型で、底部は凸レンズ状である。内外面ともにハケ。14は壺の胴部下半とみられるが、破片のため判然としない。外面に断面台形の突帯が1条巡る。外面はハケ、内面は器面が荒れているがハケの痕跡が確認できる。15は壺で、口縁部から頸部にかけて残存する。頸部は直線的にのび、口縁端部に向かって大きく外反する。胴部はあまり張らない。頸部と胴部の境に、断面台形の突帯が1条巡る。内外面ともハケ。16は器台。脚部裾近くで「ハ」の字状に開く。外面はハケ後ナデ、内面はナデ、裾部はハケ。

須恵器 (17 ~ 23) 17・18は杯H蓋。17は天井部と体部の境に鋭い稜が巡り、口縁端部内面には明瞭な段をもつ。天井部は回転ヘラケズリ。18は天井部と体部の境に鈍い稜が巡り、口縁端部内面には不明瞭な段をもつ。天井部は回転ヘラケズリ。内面に薄く同心円文当て具痕が残る。19 ~ 21は杯H身。いずれも立ち上がりはやや内傾し、端部は丸くおさめる。底部外面は回転ヘラケズリ。20の内面には同心円文当て具痕が残る。21は大きく焼き歪む。22は短頸壺の蓋とみられる。天井部



第12図 2区包含層出土遺物実測図2 (1/3)

は垂直に折れる。口縁端部は面をなす。天井部は回転ヘラケズリされ、つまみの痕跡が残る。23は、無蓋高杯。体部下半に1条の沈線が巡り、その下半には楕状施文具による刺突文が施される。脚部には長方形の透かしがみられる。

土師器 (24 ~ 28) 24は杯。上部を欠くが、体部は直線的に開くものとみられる。底部は回転ヘラ切り未調整。25 ~ 28は甕。いずれも口縁部は「く」の字状に開く。26は胴部中央にかけてややふくらみ、27は肩部が張る。口縁部は内外面ともにナデ、胴部は外面ハケ、内面ケズリ。28は口径が大きく、口縁部がほとんど屈曲しない。外面はハケ、内面は口縁部がナデ、胴部はケズリ。

試掘調査出土遺物 (第13図、図版8)

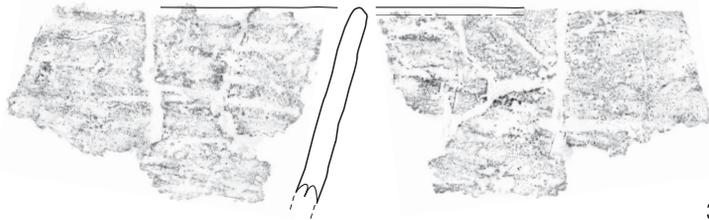
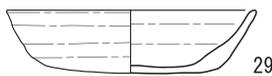
土師器 (29) 29は杯。底部と体部の境は丸みを帯び、体部は直線的に開く。底部はヘラ切り後ナデ。その他は回転ナデ。

縄文土器 (30) 30は粗製の深鉢とみられる。内外面とも条痕の後ナデ。後期後葉～晩期前葉に位置付けられる可能性が高い。

採集遺物 (第13図)

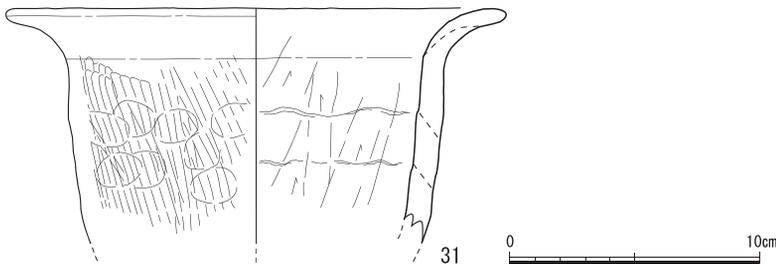
土師器 (31) 31は甕。口縁部は大きく開き、胴部は全く張らない。口縁部は内外面ともナデ、胴部は外面ハケ後ユビオサエ、内面ケズリ。

1・2区試掘調査出土遺物



30

2区採集遺物



31

第13図 試掘調査出土遺物・採集遺物実測図 (1/3)

IV. 総括

1. 遺構の時期と変遷

ここでは今回の調査で確認した遺構・遺物の時期を検討し、その変遷について述べる。

縄文時代 縄文時代後期～晩期の土器片が出土したのみであり、人的活動を復元することは難しい。周辺を見渡すと、水城跡西門付近の調査（第33次調査）において住居跡とともに、当該期の遺物が出土していることから、集落は調査対象地よりも北側に位置する丘陵先端部の微高地上に展開していたものと推測される。

弥生時代 2区の谷部を覆う包含層から土器が出土した。時期は弥生時代後期後半のものである。遺構は確認されていないが、既に削平を受けていた丘陵頂部に遺構が存在した可能性も考えられる。本遺跡において、これまで当該期の遺構・遺物は確認されていない。対象地とは谷を挟んだ西側の別丘陵となるが、本堂遺跡群において中期後半～末頃の遺構が展開している。

古墳時代 2区の谷部を覆う包含層から古墳時代後期の土師器・須恵器が一定量出土した。須恵器は牛頸編年のⅢB期に当たり、6世紀後葉に位置付けられる。土師器も同時期のものとみられるが、当該期の遺構は確認できていない。周辺における当該期の遺跡動態を確認すると、谷蟹遺跡群から北西に位置する上園遺跡や梅頭遺跡において須恵器窯やそれに付随する工人集落が営まれている。窯の規模や使用された燃料材から、周辺の森林を皆伐するような形で窯焚きが行われた可能性も想定されており（石木2008）、谷蟹遺跡群一帯の山林にも燃料を求めた人々の活動があった可能性が想定される。

古代 古代の遺構は、1区のSX01、2区のSK01・SX02・SX04がある。1区のSX01は出土遺物が小片ながらも、7世紀末から8世紀前葉に位置付けられよう。2区のSX01・SX02はいずれも焼土坑で、出土遺物から牛頸編年のⅦB期に当たり、8世紀中頃～後葉に位置付けられる。同種の遺構であるSX01も同時期のものであろう。後ほど詳しく検討するが、これらは製炭土坑としての機能が想定できる。SK01は焼土坑よりも新しく、9世紀前葉に比定できる。

2. 焼土坑について

ここでは、今回確認された焼土坑について検討する。焼土坑とは、壁面や底面に被熱痕が認められる土坑を指す。その機能については主に、①火葬土坑、②土師器焼成坑、③製炭土坑の3点から検討が進められてきた。小嶋篤氏は製炭土坑の観点から研究を進める過程で、その認定条件を下記のように示している（小嶋2013）。

- ・壁面上部がよく被熱し、相対的に床面の被熱は弱い。
- ・床面直上の遺構埋土に木炭片が多く残る。
- ・床面に石材を配置しない。
- ・遺構埋土に焼成失敗土器、粘土塊、人骨を含まない。

今回確認された焼土坑の特徴を改めて整理すると、下記の点が挙げられる。①平面形は三角形と

長方形の2種類存在する、②壁面がよく被熱するのに対し、床の被熱は弱い、③埋土下層に炭化物片を多く含む。これらを小嶋氏の認定条件に照らすと、今回の焼土坑は製炭土坑の特徴とよく一致する上、床面に石材を配置しない、埋土に焼成失敗土器や人骨を含まないといった状況からも、製炭土坑と認定する条件を十分備えている。また、土師器焼成坑について定義づけを行った木立雅朗氏は、製炭土坑と形態等は類似するものの、各要素を検討することで明確に識別できるとした（木立1997）。土師器焼成土坑の場合、薪が十分燃え尽きるように、土坑底面は灰やオキを除去して薪を直接置くため、土坑底面がよく焼けて赤色焼土化する。また、燃料を燃やし尽くすため、炭は残りにくいという。これらの指摘に照らしてみても、今回確認した焼土坑は土器焼成坑と考えるには難しく、製炭土坑と位置付けるのが穏当とみられる。なお今回の調査地は、8,000㎡を超える比較的広大な丘陵地であったにもかかわらず、須恵器窯跡は一基も確認されていない。しかし、調査区西側の谷蟹遺跡群1次調査地点においては、7世紀後葉から8世紀後葉にかけて複数の須恵器窯が展開することから、製炭の場と須恵器生産の場は明確に区別されていた可能性も考えられよう。

さて、これらの遺構を製炭土坑とした場合、木炭の生産量は少なく、小嶋氏の定義する単独立地小規模型に該当し、周辺の集落や工房での需要に応じた生産であったとみられる。牛頸窯跡群内における古墳時代から古代の製炭関連遺構は、横口付炭窯（大野城市笹原70号窯跡、中通遺跡D地点など）のほか、小嶋氏により製炭土坑と確認されている例もある（大野城市後田古墳群、塚原古墳群）が、その数は非常に少ない。また、木炭は鉄をはじめとした金属器生産と密接に関係するものであるが、牛頸窯跡群周辺での鉄生産関連の遺構は決して多くない。明確な遺構は、太宰府市の日焼遺跡7次調査において7世紀後半から8世紀中頃に位置付けられる製鉄炉が確認されている程度である。牛頸窯跡群周辺ではこうした遺構は確認されていないが、梅頭・本堂遺跡群において7～8世紀のものと思われる鉄滓が出土したことから、鉄や鉄器生産の可能性が想定されている（石木2008）。しかしながら、鉄生産と製炭がどのように関連していたのか、現状での復元は難しい。

牛頸地域は周知のとおり須恵器の生産が盛んな地域であり、生産地をとりまく山林資源の大半は須恵器窯の操業に投下されたとみて大過ない。これは調査が実施された面積に対し、確認される製炭土坑や炭窯跡が極めて少ないことから明らかである。今回確認した製炭土坑群も、牛頸山麓周辺における山林利用の在り方を大きく塗り替えるほどの生産規模ではないものの、利用方法の多様性を解明する上では新たな視点を提供するものと言えるだろう。また、詳しく言及はできなかったが、三角形の平面プランを持つ製炭土坑は糸島地域で多く確認されていることから、当地域との技術的交流についても今後検討すべき課題である。

参考文献（報告書）

池辺元明編 1989『牛頸窯跡群Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第89集 福岡県教育委員会

杉原敏之編 2009『水城跡―上巻―』九州歴史資料館

舟山良一編 1991『牛頸後田窯跡群』大野城市文化財調査報告書第33集 大野城市教育委員会

徳本洋一ほか編 1995『牛頸塚原遺跡群』大野城市文化財調査報告書第44集 大野城市教育委員会

石木秀啓編 2005『牛頸本堂遺跡群Ⅴ』大野城市文化財調査報告書第76集 大野城市教育委員会

山元瞭平編 2020『谷蟹遺跡群1』大野城市文化財調査報告書第176集 大野城市教育委員会

下山 覚編 2005『太宰府・佐野地区遺跡群20』太宰府市の文化財第80集 太宰府市教育委員会

参考文献（論文等）

石木秀啓 2008「牛頸窯跡群と鉄生産」『牛頸本堂遺跡群Ⅶ』大野城市文化財調査報告書第81集 大野城市教育委員会

小嶋 篤 2013「北部九州の木炭生産－製炭土坑の研究－」『福岡大学考古学論集2』福岡大学考古学研究室

木立雅朗 1997「土師器焼成坑を定義するために」『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社

第1表 出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	①口径 ②器高 ③底径 ④高台径 ⑤最大径 (cm) ※ () 復元値 () 残存値	形態・技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
1	土師器	甕	1区SX01	②(3.35)	口縁部は内外面ナデ。 胴部は内面ケズリ。	A:0.5~2mmほどの白色砂粒を含む B:良好 C:(内)明赤褐5YR5/8 (外)明黄褐10YR7/6	
2	須恵器	杯身	1区SX01	②(3.55)	内外面回転ナデ。	A:0.5mmの白色砂粒を含む B:良好 C:(内)淡黄2.5Y8/3 (外)淡黄2.5Y8/3	
3	須恵器	盤	1区SX01	①(25.0) ②(4.3)	内外面回転ナデ。	A:0.5mmの白色砂粒を含む B:良好 C:(内)赤褐10R5/4 (外)赤褐10YR5/4、赤黒10R5/	
4	土師器	杯	2区SK01	①13.2 ②3.1 ③7.5	内面は回転ナデ。底部にユビオサエ。 外面は回転ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	A:0.1mm程の黒色・白色砂粒、雲母含む B:良好 C:(内)橙5YR6/6 (外)淡黄7.5YR5/6、橙5YR7/6	
5	土師器	杯	2区SK01	②(1.6) ③(8.0)	内面はナデ。 外面は回転ヘラケズリ。底部はヘラ切り後ナデ。	A:0.2mm程の白色砂粒を含む B:不良 C:(内)にぶい黄橙10YR7/4、明黄褐10YR7/6 (外)にぶい黄橙10YR7/4	
6	須恵器	杯身	2区SX02	①(12.6) ②4.2 ④(9.2)	内面は回転ナデ、ナデ。 外面は回転ナデ。底部はヘラ切り後ナデ。	A:0.1~0.5mmの白色・黒色・褐色砂粒を含む B:不良、軟質 C:(内)にぶい黄橙10YR7/4 (外)にぶい黄橙10YR7/4	
7	須恵器	杯身	2区SX04	①13.8 ②4.2 ④9.0	内面は回転ナデ。 外面は回転ナデ。底部はヘラ切り後ナデ。	A:0.3mm以下の白色砂粒を含む B:やや不良 C:(内)オリーブ黄5Y6/3 (外)オリーブ黄5Y6/3	
8	弥生土器	甕	2区包含層	①(15.7) ②(5.3)	内外面とも摩滅により調整不明。	A:0.3mm程の白色砂粒・長石粒を含む B:良好 C:(内)にぶい黄橙10YR7/3 (外)褐灰10YR5/1	
9	弥生土器	甕	2区包含層	①(19.0) ②(6.0)	口縁部は内面ハケ、外面ハケ後ナデ。胴部は内外面ともハケ。	A:微細な白色・黒色砂粒、2mmほどの長石・雲母含む B:良好 C:(内)灰白10YR8/2 (外)灰白10YR8/2	
10	弥生土器	甕	2区包含層	①(19.9) ②(5.4)	口縁部は内面不明、外面ハケ。胴部は内外面ともハケ。	A:微細な白色・黒色砂粒、4mmほどの長石・雲母含む B:良好 C:(内)にぶい黄橙10YR7/3 (外)にぶい黄橙10YR7/3	
11	弥生土器	甕	2区包含層	①(20.0) ②(5.6)	口縁部は内面ハケ、外面ハケ後ナデ。胴部は内外面ともハケ。	A:4mm以下の白色・黒色砂粒・長石・雲母含む B:良 C:(内)灰白10YR8/2 (外)灰白10YR8/2	
12	弥生土器	甕	2区包含層	②(12.7)	口縁部は内外面ともハケ後ナデ。胴部は内外面ハケ。	A:5mm以下の砂粒・長石・石英がやや多く、角閃石・雲母含む B:良好 C:(内)にぶい赤橙10YR7/3 (外)にぶい赤橙10YR7/3	
13	弥生土器	甕	2区包含層	②(20.0) ③(6.0)	内外面ともハケ。	A:4mm以下の砂粒・長石・石英をやや多く含む B:良好 C:(内)にぶい黄橙10YR7/3 (外)にぶい黄橙10YR7/3、褐灰10YR4/1	
14	弥生土器	壺	2区包含層	②(18.5)	内外面ともハケ。	A:4mm以下の白色砂粒・長石・石英が多く、角閃石・雲母含む B:良好 C:(内)にぶい黄橙10YR7/2 (外)にぶい黄橙10YR7/2	
15	弥生土器	壺	2区包含層	②(13.1)	口縁部は内面摩滅のため調整不明。外面はハケ後ナデ。胴部は内外面ハケ。	A:4mm以下の砂粒・長石・石英が多く、雲母含む B:良好 C:(内)橙5YR6/6 (外)にぶい橙7.5YR7/3	
16	弥生土器	器台	2区包含層	②(8.0) ③(11.5)	内面は裾部のみハケ。外面はハケ、ナデ。	A:5mm以下の砂粒、3mm以下の長石・石英・雲母をやや多く含む B:やや良 C:(内)灰5Y5/1 (外)にぶい黄橙10YR7/2	
17	須恵器	杯蓋	2区包含層	①(12.2) ②(3.7)	内面は回転ナデ、外面は天井部回転ヘラケズリ。その他は回転ナデ。	A:微細な白色・黒色砂粒含む B:良好 C:(内)灰5Y5/1 (外)黄灰2.5Y6/1	
18	須恵器	杯蓋	2区包含層	①13.0 ②3.7	内面は回転ナデ、外面は天井部回転ヘラケズリ。その他は回転ナデ。	A:3mm以下の白色砂粒 B:良好 C:(内)灰N6/ (外)灰N6/	
19	須恵器	杯身	2区包含層	①(11.2) ②(2.9) ⑤(13.4)	内外面とも回転ナデ。	A:~4.0mmの白色砂粒を含む B:良好 C:(内)灰N4/ (外)灰N4/	
20	須恵器	杯身	2区包含層	①(11.2) ②4.0 ⑤(13.4)	内面は回転ナデ、底部に同心円文当て具痕残る。 外面は底部回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。	A:微細~3mmほどの白色・黒色砂粒をやや含む B:良好 C:(内)灰5Y5/1 (外)灰N5/	
21	須恵器	杯身	2区包含層	②(3.6)	内面は回転ナデ。外面は底部回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。	A:~2mmの白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:(内)灰N4/ (外)灰N4/	
22	須恵器	短頸壺蓋	2区包含層	②(0.85)	内面は回転ナデ、外面は天井部回転ヘラケズリ、その他回転ナデ。	A:~1mmの白色砂粒を含む B:良好 C:(内)灰N4/ (外)暗灰N3/	
23	須恵器	無蓋高杯	2区包含層	①(9.0) ②(6.1)	内外面とも回転ナデ。	A:~3mmの白色砂粒を含む B:良好 C:(内)灰N6/ (外)灰7.5Y6/1	
24	土師器	杯	2区包含層	②(2.1) ③7.8	内面は回転ナデ、ナデ。外面は底部ヘラ切り未調整、その他は回転ナデ。	A:~2mmの白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:(内)橙5YR7/6 (外)橙5YR7/6	
25	土師器	甕	2区包含層	①(12.0) ②(4.1)	口縁部は内外面ともナデ、胴部は内面ケズリ。	A:微細~2mm程の砂粒、長石・雲母多く含む B:良好 C:(内)にぶい褐7.5YR5/3 (外)赤褐5YR4/6	
26	土師器	甕	2区包含層	①(14.6) ②(9.4)	口縁部は内面不明、外面ナデ。胴部は内面ケズリ、外面ハケ後ユビオサエ。	A:~3mm程の白色砂粒、長石を含む B:やや不良 C:(内)にぶい黄橙7.5YR7/4 (外)橙7.5YR7/6	
27	土師器	甕	2区包含層	①(23.4) ②(8.0)	口縁部は内外面ともナデ。胴部は内面ケズリ、外面ハケ。	A:微細~5mm程の砂粒、長石・石英・雲母を含む B:良好 C:(内)橙5YR6/6 (外)橙5YR6/6	
28	土師器	甕	2区包含層	①(28.9) ②(7.9)	内面ケズリ、外面ハケ。	A:微細~3mm程の白色・黒色砂粒、長石・雲母を含む B:良好 C:(内)にぶい黄橙10YR7/4 (外)にぶい黄橙10YR7/4	
29	土師器	杯	試掘トレンチ	①10.0 ②2.5 ③6.8	内面は回転ナデ。外面は底部ヘラ切り後ナデ、その他回転ナデ。	A:微細な白色・黒色砂粒をやや多く含む。雲母わずかに含む B:良好 C:(内)橙7.5YR7/6 (外)橙7.5YR6/6	
30	縄文土器	深鉢	試掘トレンチ	②(8.0)	内外面とも条痕。	A:~1mmの白色・黒色砂粒を多く含む B:良好 C:(内)にぶい橙7.5YR7/4 (外)にぶい橙7.5YR7/4	
31	土師器	甕	採集	①(20.0) ②(9.3)	口縁部は内外面ナデ。胴部は内面ケズリ、外面ハケ後ユビオサエ。	A:3mm以下の砂粒、長石・石英を多く含む B:良好 C:(内)にぶい黄橙10YR7/3 (外)橙7.5YR6/6	

图 版



(1) 1区全景 (南西から)



(2) 1区SX01完掘状況 (南西から)



2区全景（北西から）



(1) 2区全景 (北西から)



(2) 2区谷部遺構完掘状況 (北西から)



(1) 2区SK01完掘状況
(北西から)



(2) 2区SK01遺物出土状況
(北西から)



(3) 2区SX01検出状況
(北西から)



(1) 2区SX01完掘状況
(北西から)



(2) 2区SX01土層
(西から)



(3) 2区SX02完掘状況
(北西から)



(1) 2区SX02土層
(北西から)



(2) 2区SX03完掘状況
(北西から)



(3) 2区SX03土層
(南から)

(1) 2区SX04完掘状況
(北東から)



(2) 2区SX04土層
(北西から)



(3) 2区SX04遺物出土
状況 (北西から)





報告書抄録

ふりがな	たにがにいせきぐん2							
書名	谷蟹遺跡群2							
副書名	第2次調査							
巻次	2							
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第184集							
編著者名	山元 瞭平							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1 電話 092 (501) 2211							
発行年月日	2021年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たにがにいせきぐん 谷蟹遺跡群	ふくおかけんおおのじょうしあさひがおか 福岡県大野城市旭ヶ丘1丁目 834番2、835番4、837番3	402192		33° 30' 38"	130° 29' 6"	2019年2月1日 ～ 2019年11月5日	8,206㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
谷蟹遺跡群 第2次調査	生産遺跡	弥生・古墳 古代	土坑	弥生土器・土師器 須恵器				
要約	調査面積に対し遺構の分布は希薄であったが、焼土坑等の遺構を確認した。焼土坑は製炭に使用したものとみられ、8世紀代に位置付けられる。また、遺構は確認できなかったものの、弥生時代後期後半および古墳時代後期の土器が一定量出土した。							

大野城市文化財調査報告書 第184集

谷蟹遺跡群 2

令和3年3月31日

発行 大野城市教育委員会
〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 山口印刷株式会社
〒848-0035 伊万里市二里町大里乙3617-5